

平成 20 年 9 月 24 日
18 : 30 ~ 21 : 00
前原集会施設 B 会議室

第 10 回（仮称）小金井市芸術文化振興
計画策定委員会
[議事録]

次第

- 1 (仮称)小金井市芸術文化振興計画案について
- 2 その他（事務連絡）

<資料>

1. 芸術文化振興計画(案)
2. 推進事業概要(案)
3. 推進体制(案)

[計画策定委員]

- ・大久保広晴委員 = 欠席
- ・大澤国栄委員 = 出席
- ・久保みどり副委員長 = 出席
- ・池口葉子委員 = 出席
- ・田川尚子委員 = 出席
- ・中野昌子委員 = 出席
- ・増田章夫委員 = 出席
- ・斎藤浩委員 = 欠席
- ・田中敬文委員長 = 出席
- ・久保田美穂委員 = 欠席

[事務局]

- ・コミュニティ文化課長、文化推進係長、文化推進係主任
- ・東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻小林真理研究室

[傍聴者] なし

1. (仮称)小金井市芸術文化振興計画案について

久保副委員長

これより第10回小金井芸術文化振興計画策定委員会を開催いたします。本日の議事に入りますが、本日は事務局より計画の案について、前半では計画の全体像と事業概要について。そして、休憩を挟んだ後に計画の推進体制について説明をしていただきます。計画の案を説明した後に、質疑応答、ご意見をいただく時間をとります。今日いただいた意見を盛り込みながら、最終的にこの案を文章にする作業に入ります。皆さまの意見、発表の最後の場になります。何卒よろしく願いいたします。それでは、事務局よりお願いします。

事務局（小林）

皆さん6月からずいぶんと時間が経ってしまっていて、もう夏も終わって、秋風がようやく吹き出したという感じなのですけれども、いま副委員長さんからご説明がありましたとおり、これから計画の案を示したいと思います。これは、申し上げるまでもなく、案です。これまでに皆さんにご意見をいただいて、案をつくる作業をしてきました。7月の懇親会の折に、現在3つの案を作成中と経過報告をさせていただいていました。その学生たちはほとんど夏休み返上で、各地の事例や、近隣市町村の状況、そういうことを調査しながら検討を重ねてきました。その中で3案をつくっていたのですけれども、その3案が出てきた時点で、もともとこの委員会で意見をいただいたものを案にしてつくっているものですから、結局3つの案もほとんど同じになってしまったのです。したがって、本日お示ししているのは、一つにまとめた案ということになります。それで、先ほども申し上げましたけれども、この間、全国における芸術文化振興の取り組みや、それをサポートする行政の施策、その他近隣市町村の文化行政等についてはつぶさに調査をしてきました。その中で、小金井市に特化した内容というのはどうあるべきか、今後10年間にわたって行っていけそうなものというのはどういうものなのかということ、文字通り本当に日々検討を重ねてきました。何かもう、ここにぽっとお示しするこの過程を、ぜひ皆さんにお見せできないのが残念だと思うのですけれども、その練りに練った案だということです。それで、これまで小金井市における芸術文化を取り巻く課題や、それを解決していくためのしくみを検討してきたわけですけれども、今日お示しますように、実際芸術文化で豊かなまちをつくっていくための取り組みや方向性や考え方が、ある意味で明らかになったのではないかと思います。今度はその取り組みを具体的に、どのように実践していくかということまで含めて計画に盛り込みたいと考えていますので、それはとりもなおさず、来年度の予算を要求していくということとも密接に結びついていくということがありました。ですから時期をなるべく明確にするということもしてみました。以上を、本日ご説明するということになると思います。まず、皆さんのお手元にある大きな、この計画案というものを説明させていただきたいと思います。

事務局（横山）

はい。いま小林先生の方からご説明がありましたが、まずはじめに、皆さんの方にはA3の

紙でお配りしていますが、この計画にどのような要素を盛り込んだかということ、全体像をご説明したいと思います。お手元にA3の紙がありますが、中央にもさらに大きくしたものを置いておりますので、まずこちらを見ていただければと思います。

一番最初に中央に目標を掲げました。いま、ここには「誰もが芸術文化を楽しめるまち 芸術文化の循環で人とまちを豊かに」という言葉を書きました。ここにはいま実は候補として、左側にあるのですが、「市民が芸術文化を選択できる環境づくり」「よりよく生きるための環境づくり」「芸術や文化と寄り添って住む場所として」という言葉も候補にあがっていて、ちょっと私たちの方では、一つにまだ決めてしまっただけとはいけないというように、もちろん思っておりますので、最終的な言葉としてどれがふさわしいかということは皆さんにもお考えいただきたいというふうに思っております。事務局側としては、条例…まずこの計画は条例ありきですので、条例の理念である「市民一人一人が芸術文化の根付く心豊かな生活を営むことができる地域社会」というところをもととして、そこから計画ではさらに一步踏み込んで、「あらゆる人が」芸術文化に触れることができる、ということが最終目標にあると。それから、個々の人の心を豊かにしたうえで、それが波及して行って、地域全体を元気にしていく…ということもやはり目標として掲げるべきと。さらに、その地域が元気になったことで、また個々の満足度もあがっていくという、そういった循環もつくっていききたいというようなことを考えています。これがいま、まず目標です。次に…この上のところになるのですけれども、これが、小金井市のいまの…現状を表しています。背景としては、まず、先ほどの先生の説明もありましたが、小金井の特性というものを活かしてこの計画をつくっていききたいというのがありますので、まずそれを十分に把握したいと。そこで、小金井には豊かな自然環境があり、住環境が充実していて、市民の満足度も比較的高いということ踏まえたいと。一方で、芸術文化に関しては、問題ももっていて、これはおさらいになりますが、それを集約したものが、情報の問題であり、場の問題であり、文化から遠い人がいるということ…。これは、ここ数か月、皆さんずっと考えてきていただいた課題です。ですので、ちょっと久しぶりということもあるので、そういった問題があったということもまずはちょっと思い出していただきたいのですが、そこでこれらの問題を踏まえて、じゃあ小金井市民が芸術文化に対してどういうふうな思いでいまいるかということ、具体的な動作として表したのが、この「小金井市民の芸術文化に対する9つの願望」というところです。左から見ていくと、「楽しみたい」、「理解したい」、「見つけたい」、「伝えたい」、「加わりたい」、「活かしたい」、「育てたい」、「生み出したい」、「支えたい」、「育てたい」、というふうに分けることができるのではないかとというふうに考えました。この問題点から見えてくる思いというものを具体的に言葉で表すことで、市民一人一人が自分の思いというものを、これを見て重ねて行って、「自分だったら…そうだな『参加したい』って思いがあるな」とか、「いや、知っていることをもっと『伝えたい』な」とかっていうふうに、計画を進めていく中で、自分なりのかかわり方というものを見つけていくことができるのではないかと、というような意図を持っています。こういった市民

の願望に応えることに重点を置きながら施策を考えていくべきだというように、私たちは考えました。そこで、下の段になります。ここでは、この計画の3つの基本方針として、柱を立てました。一つが、「潜在的な文化資源・機会を発掘」、2つ目が「多様性を保障する基盤・環境の整備」、3つ目が「対話が生まれる連携・協働の構築」です。これを具体的にどういうことを示しているのかということを下にキーワードなのですが、挙げてみました。例えば、皆さん「伝えたい」という思いが…もっと情報が発達すればいいのという思いは、新しいメディアを作ったり、いまある紙媒体を充実させたり、それからウェブを作りたいというようなところがあったかと思うのですが、それは、この「潜在的な文化資源・機会の発掘」といったところにつながっていくことができると思います。また、情報収集とありますが、これも、いまあるものをもっと「知りたい」という思いとつながって、これも基本方針の1本目である「潜在的な文化資源・機会を発掘」のところとつながっていくのではないかと思います。また、「楽しみたい」というのは全体的にかかってくることなのですが、場の問題である活動拠点がもっと充実していれば楽しむこともできますし、加わっていくこともできると思います。そうしたところは、「多様性を保障する基盤・環境の整備」というところにかかわっていきますし、もちろん先ほどのメディアのところも、この「多様性を保障する基盤・環境の整備」のところとかかわっていきます。すでにもうわかりだと思ってしまうのですが、この基本方針というのは、色々なところにつながっていくので、これがこの具体的な内容とつながるんだよと、1本の線だけではなくあちこちに結んでいくということがあるかと思えます。ほかに、もうちょっと芸術文化を支えていく人材を育てていきたいというところは、この人材というところに入るのですが、ここに「育てたい」とか「支えたい」という思いが含まれていくと思うのですけれども、ここは基本方針でいう「対話が生まれる連携・協働の構築」に集約されていくかと思えます。ほかにも、学校を拠点とした活動拠点のところ、学校を拠点にするとか、あと、まち全体…まだ使われていないスペースなどを活用していくということもこの活動拠点のところに入ってきますし、そういった形で具体的な願望というのを、どんどんここに落とし込んでいくというかたちでつくりました。これまではそういった問題点の課題を洗い出して、それに対する解決のしくみということを考えることに時間を割いてきましたが、先ほど先生の説明にもありましたように、この計画を進めていくためには、具体的な事業を推進しながらしくみを整えていく必要があるというふうに考え、ここから先は、今回少し新しくご説明するところに入っていきます。現段階で、私どもの事務局が企画している事業が、その下にあります「コ・ラボ事業」というところです。これについての詳細は、このあとまた説明を行いますが、これはこの計画を10年間で進めていくにあたって重要となってくる、計画の主体を担う体制の整備の部分とかかわってきます。この部分については、はじめ、芸術文化を支援していく人材をつくる…コンシェルジュとかっていろいろな話を皆さんとしてきましたが、実際計画のスタートと同時にその人材に動いてもらうというのはなかなか難しいことだというふうに、私たちはいままで色々なことを調べてきたうえで考えま

した。そこで人材については、3年という時間をかけて体制をつくっていきたいというふうに考えました。そこでこの下に少し…スケジュールに関することが書いてあるのですが、その人材づくりに関しては、先ほどのコ・ラボ事業…これは3つの大きく分けて事業から成っているのですが、その中の講座、いまもすでに講座は実施しておりますが、引き続きその講座形式のものは続けていきたいと考えていまして、その中の講座の中で、人材の体制づくりというものをつくっていきたいというふうに考えています。だいたいここまでが計画のご提案する内容です。ここまででご質問があれば出していただきたいと思います。

田中委員長

ここまでつくるのに、どれくらい時間がかかりましたか。

事務局（小林）

すごく、です。

事務局（横山）

表せないほどに…。

事務局（中村）

先週とか、なかったようなものです…

田中委員長

パーフェクトで、委員は何も言えなくなっちゃう…。

増田委員

何も言えないですね。

事務局（小林）

ここの、目標の言葉とかの言葉とか、そういうもので、こういう言いかたの方が適切なのではないかということでも結構です。まだ延々と説明が続きますので、このあとにまたお伺いするということがあります。なければ、具体的な事業の話に進ませていただきたいと思います。

田中委員長

そうですね。

事務局（佐藤）

延々と続きます。次の方に行こうと思います。次の資料は、2番目になります。2枚ホチキスで留めてあるものになりますが……。いま、全体の流れの話があったと思うのですが、次にお話しするのが、この具体的な事業の部分を、何をやるのかという部分を具体的にお話ししようと思います。ということで、資料2をご覧になりながら聞いていただきたいのですが、まず始めに皆さんすでに気になっているかと思いますが、コ・ラボっていう事業のコの間に点がついているコ・ラボ事業ということにしている名前の理由からいこうと思うのですが、コ・ラボ事業というのは、コラボレーションとラボラトリーという2つの言葉を組み合わせたらいいんじゃないかなということで、真ん中に点を置いて考えました。なぜ、この2つの言葉を合わせたかと言いますと、下に「一緒につくる、探す、学ぶ」と書いたのですが、まずコラボレーションという言葉には、そのまま訳したらコラボになってしまうのですが、一緒にこう何かをするであったりとか、そこにこのコって言葉の意味があります。もう一つ、何でラボラトリーという言葉をつけたかと言いますと、ラボラトリーって言葉は研究所であったり、何かを調べる場所という意味があるのですが、何かこう一緒にやるときに、いままでなかったものを探す、小金井でこんなものがあるんだよってものを同時に探したり、また何かをやりようと思ったときにこういうやり方があるんだってことを学びながらやっていくっていうのが重要なのではないかということで、コ・ラボ事業っていうふうにしてみました。ちなみに、コは一緒にやるっていうのと、プラス小金井のコっていうので使えるかなと思って、コ・ラボ事業としています。

田中委員長

小金井市にNPO法人「ひ・ろ・こらぼ」っていうのがあるの知っている？

事務局（佐藤）

ああ、そうなんですか……。

田中委員長

使うんだったら、一回言っておいた方がいいかも。

事務局（佐藤）

その辺も、検討に入れてやと思います。

池口委員

喜ぶんじゃないですか。

事務局（佐藤）

一応、そのコ・ラボ事業というところでいくのですが、全体としてどういうことをやるか

と言いますと、まず小金井の地域にある資源、人やもの…もうすでに色々なものがあると思うのですが…薪能があったり、貫井囃子があったり、ジブリのスタジオがあったりと、色々な人やものがあるというところと、さらに、外から新しく芸術みたいなものを表現している人であったり、作品が入ってくることによって、お互いに刺激しあって両方とも何かこう一緒に新しいものを生み出して行けるような場所になればいいんじゃないかなということをお考えしました。そういうことをテーマにした事業では、市民がそこに参加することによって、「あ、小金井にこういうものがあったんだ」という地域資源の理解であったり、「芸術ってこういうものなんだ」というのを何となく理解していったりっていうなかで、将来小金井の人たちが自分たちで芸術文化振興の担い手となっていくような人を育てるであったり、特にそれが市民と芸術をつなぐような担い手っていうものが、事業を通じて育成されていったらいいのではないかなということをお全体として考えています。

というところがコ・ラボ事業という名前の由来であって、全体のところなのですが、ではなぜこういうコ・ラボ事業というのを思いついたのかということをお次に説明しようと思おいます。それが、「なぜコ・ラボ事業なのか」のところおです。

小金井という地域における芸術ということおで、芸術っていったときに、小金井でどうおあり方があるのかなっていうのを次にお考えしました。次に出てきたところが、ここの議論の中で、小金井ってどうおいうところなんだろうっていう話の中で出てくると、必ず野川であったり、公園であったり、桜っていう自然環境が豊かな地域であるということが一つキーワードとしてあがってきたと思おいます。というところが自然環境というところおと、もう一つは、学校が多かったり、あと子育てっていうキーワードが結構出てきていたかと思おうのですが、ある程度、中央線沿線に住環境っていうものお、もう一つキーワードとして出てくるのではないかなというふうにあがってきました。というところから考えると、小金井っていうのは、ある程度日常生活を営む場所としての特性があるのではないのかということをお考えしました。そういうところに、じゃあ芸術ってどうおいう意味があるのかなと考えたことが、次の日常生活へ驚きと発見を与えるような存在として芸術というものがあるのではないかということをお考えしました。特にその驚きと発見を与えるというおと、いまこう生まれてくる、一緒に生きていくような芸術っていうものおいいのではないかというところが一つおと、実際にいま生まれてくるような、一緒に生きていくような芸術と小金井にある特性…先ほども言いましたように、小金井で活動する人がいたり、小金井にすでにある資源っていうものおたくさんあるので、それを組み合わせることによって、コラボレーションしていくっていうことが事業の中でできたらいいのではないかということをお考えました。というところおで、新たな芸術作品のようなものを小金井で一緒につくっていくということおと、同時に、それによって市民の人たちが生活を送りながら何か新たな発見を見つけていたらいいのではないかなというところ…おで、コラボレーションとிட்டときに、どちらかおいいのではなくて、お互いに一緒にやることによって、両方ともこう何か新しいものが生まれたり発見があるような状況がつくれたらいいのではないのか、ということをお考え

ています。というところが全体なのですが、このコラボレーションという言葉には、市民の担い手をつくっていくといういみでも、行政と市民が一緒にやっていくという言葉も一緒に含んでいけるのではないかと考えています。というところが、なんでコラボ事業というのを考えたかという理由なのですが、次に具体的にこの事業をやっていくにあたって、何かキーワードがあるといいのではないかと考え、次に事業のキーワードの部分を見ていこうと思います。事業のキーワードなのですが、まず最初に環境という言葉と、「音」「身体」「言葉」というものが出てくるのではないかと考えました。なぜその言葉なのかというと、その下にありますが、先ほど説明しましたように、小金井ということ考えたときに、まず一つとして自然環境というものが出てくるだろうというところと、生活を営む場所としての住環境って言う言葉が出てくる…というところから見ていくと、何かこの事業をやる全体のキーワードが環境というものに設定できるのではないかと考えました。さらに、じゃあ環境と一応テーマにしたのですが、じゃあそれをどういうふうにもこの芸術っていうもので接近して、切り口としていこうかというときに、この「音」「身体」「言葉」という3つのキーワードを上げてみました。下の箱の中に、3つの理由を入れたのですが、まず最初に「音」というものをなぜ音にしたかと言いますと、ふだん目で見たりしている風景を、一度音から周囲の環境を見ていくことによって、何か違ったものが見えてきたりするのではないかなあというところなんです。つまり、いつも小金井で生活しているんだけど、一回耳をすませてみると、「ああ、こういうものがあったんだ」「商店街にこんな音楽が流れていたんだ…知らなかった」みたいなことに気づくのもいいと思うのですが、何か新しいものの見方ができるのではないかと、だからそこを問うということがあります。2つ目「身体」と書いたのですが、これはからだとしていいと思うのですが、皆さんが当たり前にも思っているのは、からだっていうものを一回こう、「どういものなんだろう」ってちゃんときちんと考えてみるっていうことによって、自分のからだっていうものと、その外にある環境っていうものの関係であったり、何かもっとその自分の外にあるものをどう見えているのかとかを考えるようになるのではないかと、というところで「からだ」というのが2つ目です。最後に3つ目、これはからだとちょっと似ていると思うのですが、いまこう説明しているときも言葉を使っているように、ある種いつもこう言葉を使っているけれども、いま一度その言葉っていうのを考えることによって、言葉そのものも持っている力であったり、言葉にすることでより深く何かを見るようになる…っていうこともあるのではないかと、というところで言葉っていうものを設定しました。というところで、一応、環境というキーワードがあって、それにこの3つのキーワードで迫っていけるのではないかと、ということ考えました。で、それによって、事業全体としてこれまで小金井にあったものを何かこう芸術の創造っていうこれから生まれてくるようなものをきっかけとして、こう新しいものを生み出す…っていうその場所として小金井っていうものを事業全体としてとらえていけたらいいかなというところを、事業背景として考えました。というところが、事業の背景にどういうことをキ

ワードとしてあるのか、というところなのですが、次に2枚目にいきます。2枚目にいきますと、じゃあそれで具体的に何をやるのかという説明に入っていきます。で、事業全体として何をやるのかというのは、まる3つで示してあるのと同じなのですが、一つはアーティスト招聘というものと、もう一つはまちなかに拠点を整備していくというもの、最後にきっかけとなるような講座をやっという3つの軸があります。次にそれを順番に見ていこうと思うのですが、まず一つめとしてアーティスト招聘事業というものをつくってみました。これは地域外のアーティスト掛ける小金井と書いたのですが、何かしらのアーティストを一人選定して、小金井に来て一緒に何かをつくってもらうということがいいのではないかといいところなんです。先ほど、だいたい最初の3年という話があったと思うのですが、3年で考えてみたところ、最初の3年は、どういう人がいいかっていうことを選んだり、そこで決まったときに、その人がどういう人かっていう公演が1年目はできるのではないかといいことを考え、それで一緒に作り始めて、2年目だとまだちょっと出来ないけれど、こうなっていますという中間報告を行って、3年目には小金井で一緒にコラボレーションしてつくったものを公演…という形でできるのではないかといいことを考えました。次に、そのハコの中にあることの説明なのですが、じゃあ、呼んでくるアーティストはどんな人がいいのかといいことを考えたときに、まず1つ目として、その運営であったり制作までを市民と一緒につくっていくような人がいいのではないかといいところが一つと。2つ目は、これまでの芸術文化のあり方みたいなものであったり、小金井っていう地域がこういうものであったんだという、何かものの見方を変化させるような作品をつくるということがふたつめです。3つ目、参加した市民も、「自分がこういうことができるんだ」といいことに、何か気づけるような作品をつくるということが出来る人がいいのではないかといいところを現時点では考えています。それでアーティストが来て一緒につくりますが、その際に、一緒につくっていくことに、どういうことをやっているのかっていいのを市民と一緒に考えるワークショップであったり、あと呼んでくる前に、どういう人を呼んでいこうかっていいことちょっと相談する講座っていうか、どういう人がいいのだろうかっていいことを知る講座っていうのも必要だろうというふうに考えています。…というところが、地域外のアーティスト掛ける小金井でやるアーティスト招聘事業というものです。一つのまるの説明になります。次に2つ目、まちなかアート事業と書いたのですが、これは芸術文化と市民というものをつなぐ場所がやっぱり整備していかなければならないだろう、といいことを考えました。一つ目の事業としては、アートが住めるまちづくり、芸術文化の拠点形成事業と書いたのですが、その場所をつくるといったときに、何が考えられるかといいことを考えたときに、3つくらい場所の種類があるのではないかといいことが出ました。一つ目が、情報の拠点…というの、これはもうさんざんこの中でも出てきたように、情報がやはりないのか、あるんだけど見えていないのかという問題が色々あったと思うのですが、そこに行くとなんかできるのかであったり、何をやっているのかっていいのを知る場所みたいなものがあった方がいいのではないかといいこ

とで拠点の一つ必要だろうということが、情報拠点です。2つ目として、じゃあ、何か表現するときには、やはり準備をする場所…アトリエであったり、稽古場みたいなものが必要になってくるのではないかと、というところで準備拠点が2つ目です。3つ目は、じゃあ、それが何かを表現するような場所が必要だろうということ、発表したりする場所として表現の拠点というものが整備する場所としては必要になるのではないかと、というふうに考えました。この3つの場所なのですが、次に連携で場所を整備していくと書いたのですが、実際、じゃあその拠点がいまあるのかというと、まあホールはあと何年かしたらできるってことも視野に入れてやっていけばいいと思うのですが、それまでに、新しい場所をつくるというよりも、何かいまある場所をこう活用してそういうことができるんじゃないかということも模索していいのではないかと、というふうに考えています。この場所というところなのですが、その招聘してくるアーティストの活動する場所にもなっていくと思うのですが、一方でいままで市内で活動してきた人たちも、そこで活動できるような場所に変えていくということによって、そこ自体が市民の活動できる場所に変化していくということも、一つ重要になってくるのではないかと考えています。というところが、芸術文化の拠点形成なのですが、次に2つ目は、学校連携事業…これは、ガッコラボ…ってこう名前の方が先に出してしまったのですが…このガッコラボっていうものを、学校と連携して何かをやるということが重要なのではないかと、ということが拠点形成の2つ目です。これは、学校生活で、教科書とかをテーマにした公演をやることによって、より学校生活に気づきであったり、何かこう新しいものを発見していくということをテーマにしているのですが、なぜこういうことを考えたかと言いますと、やはりこの委員会の中で、学校にいる子どもであったり、子どもってのがかなりキーワードとして出てきたと思うのですが、子どもであったり、子どもが生活するすごく長い時間いる場所として学校という場所が出てきたと思いますので、その中で、やはり学校と芸術文化活動をつなぐ事業ってのが必要だろうっていうことでこれを考えました。この学校連携事業においては、学校と芸術文化をつなぐ事業である一方で、子どもだけではなくて、学校には先生もいるので、先生も含むであったり、また、学校生活をテーマにしたという部分と関係があるのですが、子どもをきっかけに家族みんなで何かを知るっていうことも、巻き込んでやっていけると、ということも重要なのではないかと、ということを考えました、これは必ずしも子どもに限ったことではなくて、子どもを中心として、その家族を巻き込んでいく事業としてやっていけたらいいのではないかと、というふうに考えています。まちなかの部分の最後の3つ目、小金井アートウィークスと書いてあるのですが、これはすごく具体的に名前が出てきているのですが、考えていることとしましては、ウィークスってあるので、何週間か小金井アートウィークスっていうものがありますよっていう期間設定をするっていうことと、その時期にこういうことがありますよ、ここに行けばこういうことが見れますよっていうことの地図を作成するっていうことと、そこでこういう週間をつくるので、何かやりたい人はいませんかっていうことを募集して、そこにこう助成金などを与えて公演などをするというこ

とを組んでいけたらいいのではないかと考えています。で、これをなぜ考えたかといいますと、期間設定の部分とかかわってくると思うのですが、この期間設定は何となく秋がいいのではないかなというふうに思っているのですが、それはなぜかという、やはり、いま市民まつりみたいなものがあったり、環境博…もこの時期でしたっけ？…があると思います。ウィークスっていうので、薪能は…8月ですよ…そうすると薪能はどうなるかわからないのですが、まあ時期の設定の仕方になってくると思うのですが、この事業として新しいことをやる一方で、いままであったものを一緒にこうやっていくような時期をつくってもいいのではないかっていうことで、この小金井アートウィークスっていうものを考えました。で、この3つをやることによって、まちなかの色々なところに芸術文化に触れる場所ができるということが事業2つ目の目的です。最後3つ目になるのですが、市民講座・ラボと書いたのですが、これは市民の参加のきっかけの講座として何かこういくつか展開できないかということを考えてみました。いまの時点だと4つあげていますが、まず一つ目として、「アートと市民」講座（通年）と書いたのですが、この事業全体の目的としては、この小金井で芸術文化をやっていく、また何かこう、つないでいく人材を育てるということが目的となっていますので、1年間かけてそれってどういうことなんだろうだったり、どうすればいいんだろうっていうことを考えていける場所を設定して、そこに来た人を一緒に巻き込んでいくっていう場をつくれなかなということを考えてみました。これを通年で最初に思いついたのは、やはりこの委員会でやってきたような議論みたいなことも1年間かけてやってくると、何かこういうこともやりたくなるよねっていう話になってくると思うので、何かこう1年かけて考えていく場所をつくれなかっていうことで、講座をつくりました。次に、下3つはラボという名前にしたのですが、講座は1年間ずっと続いていくのですけれど、具体的にちょっとうることをやりたいなっていうテーマや切り口を絞って短期間でいくつか講座を入れてもいいのではないかとこのころで、地域と発信と歴史っていう、ちょっと細切れにした講座をラボと名前をつけてつくりました。これは時期をこう、最初から順番に3か月ずつずれていくのですが、最初の地域ラボというのは、講師の方を招いて、講師は小金井の方でいいと思うのですが、小金井をこういう見方があるよっていうのを一緒に見て回ったりして、そこで発見したものを何か記録に残していくことによって、小金井にこういうものがあるっていうことを発見していく講座がまず一つあるだろうというところが地域ラボ。2つ目が発信ラボと書いたのですが、これは芸術文化の情報を発信する担い手づくりっていうのが重要なのではないかとこのころです。この発信ラボに限りましては、もう今年やっている講座がこういうテーマでやっていますので、これを何かバージョンアップしていけたらいいのではないかなというふうに考えています。お手元に「講座通信」っていうのがありますが、今年は講座をやる中で、具体的にこういうものができたりっていうことも出てきたので、こういう担い手の方も巻き込みつつやっていけたらいいのではないかなということを考えています。というのは、先ほどちょっと文化コンシェルジュみたいな話も出ていたと思うのですが、こういう

講座を続けていくことによって、そうやって人にこう何かを紹介できるであったり、水先案内人のような、人を、担い手を育てていけるのではないかと一つ考えています。もう一つは、具体的に小金井にどういう人がいるんだらうっていうことを調べる担い手になっていったり、それをこういう形でまとめていくような担い手にもなっていくのではないかと、ということも考えています。これは何度も議論の中に出てきた、その情報を集約するって言ったときに、じゃあ誰がやるんだっていったときの、問題解決にもなっていくのではないかと、ということ、具体的な発信ラボというのを入れました。次に最後、その「歴史」の部分なのですが、この歴史の部分は、先ほど呼んでくるアーティストであったり表現者の人が、いまつくっている人だということを書いたのですが、やはりいま行われている表現ってというのは、すごく難解な部分もあったりすると思うのですが、それがなぜそうなったのかということ、ちょっと講座の中で見ていくことによって、いま行われている事業を理解できるきっかけとなっていくのではないだろうかといったところで、その表現自体を歴史的に見ていく講座っていうものも設定してみました。というところが、講座・ラボの部分になってきます。それによって市民参加のきっかけ講座にしていこうというところが3つ目になります。ひとつと説明してきたのですが、一応事業の部分はこの3本柱で考えています。これを次に具体的にどういうふうに展開していくのかという部分は、けっこう重要になってくると思うのですが、それが最後の事業の展開の部分になるのですが、この準備講座、地盤づくり＝人づくりと書いてあるのですが、この事業をやることによって達成することとしましては、小金井にある人やものっていうものを発見していったり、一緒に何かをつくって触発しあうってということと、それによって新しい現在の芸術文化の表現であったり作品っていうものが生まれていく…ということと、もう一つ重要なのが、将来その小金井の芸術文化振興の担い手、特に市民と芸術文化をつなぐ担い手を、人づくりをしていくというのが、事業の大きな目的となってきます。というところを考えたときに、一番下の行になってくるのですが、3年でやることというのは、例えば3年後にホールができたとしたら、そのホールの運営をいままでに一緒にこう担っていく人を育てていくってことがひじょうに重要になってくると思います。そうすると、やはり最初の3年間でやるのは、講座なんかを重点的にやっていく必要があるのかなということを考えています。というのは、一番最後に書いたのですが、例えばガッコラボ、学校連携事業と書いたのですが、やはりこの委員会の中でも出てきたのは、「学校と何かをやるのは大変」であったり、実際に学校連携といってもすぐにできるものではない、その難しさっていうのは、ひじょうに議論の中に出てきたと思います。ので、もしこれをやるのであれば、最初の方は、じゃあそれってどうやったらやっていけるのだからっていう場づくりであったり、そういうやっていこうという人を講座なんかを通じて育てていくってのがひじょうに重要になってくるのではないかと、ということを考えています。というところで、最初の3年間はその担い手をつくっていくということを重点的にやっていく必要があるのではないかと、ということになっています。で、全体のスケジュールであったり、どう

やって進めていくかということは次またあとで替わりまして、具体的に説明をしていこうかと思いますが、一応ここで、事業で何をやるかというのはひととおり説明を終わらせていただきます。ここまでで質問は…。

田中委員長

この事業 1、2、3 っていうのは順序性があるのですか、それとも同時並行的に…？

事務局（佐藤）

そうですね。やはり最初考えていたときは、3つが同時並行的にやっていくっていうのがすごく意義があるのではないかっていうことと考えました。というのは、先ほどアーティストを呼んでくるといったときに、あるその活動をしている人をよく知るために講座をやるであったり、こう連動して展開できるかなっていうふうに考えました。そういう意味では3つは、これで重なりあいながらやっていくかなということを考えていたのですが、実質的にやっていこうとすると、一番最後の「事業の展開」の部分に出てくるのですが、実際は最初の3年くらいは、その講座の比重がひじょうに大きくて、アーティスト呼んでくるであったり、っていったところはパイロット事業的にやったりとか、その配分みたいなものはあるのではないかっていうふうにいる時点では思っています。

田中委員長

そうするとその資料 3 で出てくるのかもかもしれませんが、全体を統括するような推進委員会を想定しているのだと思いますが、この委員長、あるいはコーディネーター、そういう人の役割も必要になるのではないのでしょうか。全体を統括している人がいないと、みんなばらばらで、計画がやりにくいと思うんですね。

事務局（佐藤）

そうですね、その人は大変なことになると思いますが。

久保副委員長

何か質問はございませんか。

事務局（佐藤）

一応これが終わったら休憩ということで。

事務局（小林）

この質問を訊いて出していただいて、事業の話はここで終わらせてしまいますので、できるだけこういうことやった方がいいのではないか、これどういう意味か、何を考えてるの

か、などでも結構です。

田中委員長

事業のところに「担い手」という言葉が何度も出てくるんですが、都合5・6回出てくるんですが、これって共通した人なんですかね。それともみんな違う人なんですかね。さっきの質問と非常によく似ているんですが。一人の人がやるとも思えないけれど、全部違う人がやるとも思えないんですよ。随分重なり合うとすれば、こことここが同じ人で、というのがないと、こんなに人がいるのかね？みたいな。

事務局（小林）

いっぱい出てきてくださったらいいなということは思っています。本当に誰もが関わって、やりたいって人が出てくればということです。

田中委員長

そうすると、ますます私が最初に言った、全体を見通すようなグループとか人がいないと、大変だなあと思うわけですが。

事務局（佐藤）

そういう意味ではいろんな人が出てくるように、いろんな種類の講座を行い、というところを考えています。

事務局（中村）

補足しておきますが、複数の講座を受講してもらっていいんです。実際に講座を開催する時期も、多少重なってくると思いますし。関心のあるものをいくつか取ってもらってもいいし、どれか一つでもいいし、というふうに考えています。

事務局（小林）

15分くらいですが、全員の方から意見を頂ければと思います。

久保副委員長

ちょっと休みましょう。

事務局（小林）

休みはもう少し後にしてください。もし意見がない人はいい・悪いでもいいです。

中野委員

この計画案がよくまとめてあるなあというのは分かるんですけども、自分がいざこれに携わるとなると、まあ、自分は何していいのか全然分かりません。そういう意見なんですけど。たしかに、これは必要だ、説明を聞いていて必要なものばかりが上がっているのはよく分かるんですけど、ただ自分がどれだけこれにやるとしたら携われるかな、っていう不安はありますね。難しいっていうか、そんな気持ちです。

池口委員

関連して言えば、例えば私だったらね、このまちなかの、要するに地域に入ってやっていく活動の拠点をそういうものに使えばできるかな、なんて思ったりして、感じました。おっしゃるように、それをどう実行していけるかは分からないと思いますが。あと、私はこの基本方針というところの言葉がとてもいいなあ、と思いましたね。潜在的な文化とか、多様性という、これまで私たちが何気なくここの議論の中で、大事にしてきた言葉かなあと思っているんですが、それを引き上げて下さったんだろうなあ、と思いました。あと、目標に関しては感想なんですけど、「楽しめる」ということは別に楽しまなくたっていいんじゃない、っていうか。候補の中に出ている、「芸術や文化が自分に寄り添う」という、そういう言葉の方がいいのかな。

事務局（小林）

それは私も同じことを思っています。

田中委員長

あの、表現するとどういうふうなことになるんですか？

池口委員

そんな難しい…。

田中委員長

「芸術の香りがほしい」とか。

池口委員

いや単純に、「楽しむ」って出しちゃうと、楽しまないといけないのかと。私ってすごいへそ曲がり、絵を見に行くとき絵を見たら感動しなければいけない、音楽を素晴らしいと思わなければいけないという、何となく今までの教育でしょうかね、芸術に対する堅い価値観が昔はありましたね。それを打ち破れたら大人になって、経験を積む中で、別にいいんだっていう、そういうこともあるので、「楽しまなければならない」という意識を人々に与えてしまう目標の言葉には、ちょっと抵抗があります。

中野委員

私なんかは単純ですから、「楽しめる」っていう言葉がすごくいいような気がするんですね。何かこう、やっても楽しめる、見ても楽しめる、聞いても楽しめるという気持ちで参加できるんですね。だから私はどちらかというところの「楽しめる街」というのは、非常に感動しました。

田川委員

私も、自分自身が楽しみたい方ですので、いろいろな役割それぞれここあると思うんですけども、「〇〇の担い手づくり」っていう、担い手ばかり育つんじゃないかという、そうじゃなくて、担い手づくりばかりじゃなく楽しみたい。

増田委員

なかなか担い手とか後継者とかね、つくるのは結構大変なんですよ。私も長いこと20年もやってて、どっかで誰かに引き渡したいんだけど、担い手つくっていただくっていうのは本当にありがたいと思いますが、現実としては非常に大変なんだと。こういう講座をやってそういうのを身につけて、それを現場の活動で生かすっていうのは、またそれはそれで、現場を踏んでいない人が頭の中で描いたイメージだけで入ってくると、やっぱりとんでもないかなりのズレが出てくるんじゃないかという心配もちょっとしています。一つのイベントやるのでも、いろんな人と相談して、たった一日のためにやるわけですから、そういう意味でこれだけのことをね、これあまり盛りだくさんすぎてちょっと大変じゃないのか。特に最初の3年のところなんですけれども、ある意味では必要な人材を、当面必要になってくるそういう人を育成するような方がいいんじゃないかなあと、私はそう思っています。そのかわり相当な数の人間がいなければできないような気がするんですが。ほとんどの人は、芸術家はそういう職業してるからいいんですけども、我々普段仕事や活動をしている人間は、大体ボランティアでやってるわけですね。そういう意味じゃ、講座に1年通して出ること自体結構大変ではないのかと。もともとそういう人たちは、普段でも多分やってる人たちで、なかなかその忙しい中をまたこれに時間を費やして大変なことだなあと。私が今からやれと言われたら困るんですけども。

事務局（小林）

皆さん、思い出してほしいのは、10年の話をしているということです。これから、10年のことを、とりあえず最初の3年ということで話しているのです。1年間でという話ではないので、なるべく緩やかな気持ちでやっていただきたいと思います。

増田委員

あとはその、具体的に分かりやすいイメージの、どういう人がほしいとか、分かりやすい感じにした方がいいんじゃないかと。こういう人がほしいとか。ちょっとこれでは分かりづらい。もっと分かりやすい、イメージがわくような。

久保副委員長

担い手というのは専門家なのか、そうじゃないのか。専門的にそれに携わっていける、っという状況の人なのか、すごく範囲が広いような気がしますし。

大澤委員

さっきの中野さんの話なんですけど、やっぱり楽しくなければというのと、さっきから出ているように、担い手も専門的な人なのかということ。その人たちは人を楽しませて、楽しい中で、いろんな人を変えたり興味を持たせると。うちも専門的にやらせる人と、少し体験してみる人を分けているんですよ。まあ大体時代が変わってきてるんですね。とにかく後継者という人も、楽しくしなければ続かずにそこで終わっちゃうのだと思います。難しいと思います。

久保副委員長

担い手っていうのは、楽しむ人を支える人ですごく厳しいんですよ。運営する側って、やっぱりすごく大変なことですよ。見る人は楽しいけど、楽しいことをやろうとすればするほど、すごく大変なことだと思うので。

事務局（小林）

少しいですか。そう思われるのも当然ですが、皆さんどちらに属しているかは分からないのですが、そういう支える人を育てるための大学教育が、もう 1990 年代半ばぐらいから出てきているのです。裏方で支えることだけをやりたいていう人たちも、実は育ってきてるんです。実はその人たちが活躍する場がないんです。むしろ。本当はそちらの方が問題なのです。プロジェクトをボランティアでやりませんかと声をかけると、それに参加したい人たちはかなりいっぱいいます。担い手といったときに、芸術の専門家は小金井にはいっぱいいらっしゃるんです。大澤さんもそうだし、増田さんが率いていらっしゃる方たちも皆そうですし、それから芸術家としてプロで活躍されている方も小金井にはいっぱいいらっしゃいます。でもその人たちと市民の人たちをつなぐ役割を担う人がいないのです。例えば増田さんたちのグループの人たちの後継者を育てていくっていうことは、やっぱり団体自らがやらなくてはならないことだと思いますが、その担い手とここで言う担い手とは全く違います。「つなぐ」ところが違うのです。そこが大切だろうから、積極的にここに力を入れて育てていってはどうか、という提案だということです。

大澤委員

先程お話の中で薪能とか出たんですが、私が思うには全く違うんですよ。例えば小金井の中でやるっていうだけで、小金井公園の中で仕切って、薪能っていうのを高いお金を取ってやるわけじゃないですか。うちだったらやっぱり小金井のためって言えばタダでもやりますよ。増田さんたちだってそういう方じゃないですか。少しでも皆さんに意識が広まればっていう。でも薪能って全く別なものなんですよ。私たちも一度出演させていただいたことがあるんですけど、やはりもう仕切られた中で決められた人にしか、っていう。だから今言ったように違うんですよ、やっぱり。小金井の中でやってる伝統文化だけど、私たちはこうなんだっていう壁があるんですよ。皆さんは分からないかもしれないけれど、その辺が全部一緒にされちゃうとおかしくなっちゃうっていうか。

事務局（小林）

そういう違いというのはあるかもしれませんが、ただやはりあの場所に敷居を作って能舞台を作って、優れた出演者を呼んでくるということは、芸術文化の機会を身近に提供しているわけですし、費用がかかって当然だと思います。そもそも芸術文化活動にお金がかからないものだと思わせてもいけないと思います。だから大澤さんの活動に対してはきちんと支払われるべきだと思うんです。つまり大澤さんご自身が小金井で活躍してらっしゃるから、小金井のためだったらお金を取らずにやってもいいですということで、ボランティア精神でやっていらっしゃるかもしれないけれど、本来は大澤さんにお支払いをしてやるべきものだと思います。

大澤委員

ですから私たちも、小金井以外だと本当にそれなりに見てくれるんですよ。でもですね、私も最近は苦勞して厳しく練習をしていますので、皆さん日本中でそれなりに見てくれます。ただし、時代が本当に変わってるんですよ。こういうことに対していくら伝統芸能とか芸術文化とか言ってますけど、あまり子供が動かないというか、親に関心がなくなってきてるんです、正直言って。ですから、先程も出たんであんまりこういうこと言うと怒られちゃうかもしれないですけど、薪能もお金をゼロにするとか安くする価値というのはやっぱりありますので、その辺は一概に私も何も言えないですけど。ただ私たちも全てがボランティアというんじゃなくて、やっぱり一番子供ですよ、若い子たちに興味を持ってもらわなければ。押し売りできるものじゃないですよ。こういうものなんだから大事に思えとか、よく思えと言えないもんじゃないですか。だからやっぱり考える方としてみれば、楽しませるもんなんだけど、裏では毎日夜中の12時まで話し合ったりしているんですよ。だからその辺は理解しろって言っても無理だとは思いますが。

事務局（小林）

いろんな紹介の仕方ができると思います。大澤さんの活動一つ取っても、大澤さんが努力されていることだけではなくて、この「まちなかアート事業」やコラボレーションという事業などで、もう少し大澤さんの活動の紹介をよりよくできる人が別にいれば、してもらっていいと思うのです。今多分、増田さんたちのグループの人もそうだと思いますし、みんながそれぞれ一生懸命やってらっしゃると思うのです。それでその中で担い手の問題もそうだし、後継者の問題もそうだし、分かってもらえないみたいな思いも持ってらっしゃるかもしれないですけども、だけどやっぱり私たちここで皆さんのお話を聞かせていただいて、こんなにいいものだからもっと知ってもらいたいよね、って単純に思うのです。そのために、こういう事業をしてみようと提案しているわけです。

大澤委員

言われているところはよく分かるんですけど…。

事務局（小林）

やってみないと分からないではないですか。

大澤委員

でも、もしやってみないと分からないって言うんでしたら、私たちはとっくにもうこういうことをやっていると思うんですよ。まあメンバーでも数名、3名4名とおりますし、ただやっぱり言われていることが難しいと。言っていないか分からないですけど、役所の中で理解できるというか、そこまで気にかける人間がないということはいつも言われちゃうんで…。

久保副委員長

それを変えていくっていうことでは。

事務局（小林）

だからしきりに佐藤君が言ってくれていた、地域資源というものをもう一回見直しましょうとか、いつも私たちの周りに貫井囃子があって、あまりに当たり前すぎてそんなに大事なものだと思えないんだったら、大事なものなのだと理解する事業をやってみましょう、っていうことなのだと思います。

大澤委員

だから私は押し付けるとか、小金井で絶対に貫井囃子がこうだっていうこととかは、絶対に一言も言ったことないですよ。

事務局（小林）

だから誰かに発見される必要があるのだと思います。

大澤委員

やっぱりでも見てもらわなければ駄目なんですよ。

事務局（小林）

だからそのための場をしつらえましょうっていうことです。嫌ですか？今までやってきたことが駄目だったのだとしたら、やり方を変えてみませんかという提案なのです。それで駄目だったらまた元に帰って考えればいいじゃないですか。

増田委員

いや、団体じゃない。どっちかって言うと私の仕事の方はいいですよ、仕事ですから。私がやってきたことは、どっちかって言うとそれ以外のことが文化振興はいっぱいやってきてる、文化協会ですね。自分のこと、彫刻のことをやっているよりも、どうやって盛り上げていくかということ随分やってるつもりですが、芸術を実際に形にして、みんなに来てもらってとなると、それは相当なエネルギーと費用がないとできない。それと先程言ったような、そういうものを支えてくれる人材ですね。そろそろ育たないと困るんだけど、ただそういうものがなかなかない。ただ文化協会でも新しいものが生まれてきているのは確かです。ヒップ・ホップとか、ああいうダンスは昔はなかったけれど、でも一番お客さんが来るし、若い子が全く違う方法で出てきている。そういう芽は育っていると思いますね。それから、永年携わってきた方がお亡くなりになったりするとできなくなると。するとそこでしぼんでなくなっちゃうんですね。今そういう分野がたくさんある。例えば謡なんかがそうですね。平均すると80代とか、詩吟とかね。そういう分野もたくさんある。それはそれで好きな人が残っていけばいいと思いますけど、また新しくそういうものを入れていくという、新しいものを取り込んでいく場というのは今までないと思いますけれども、ここでぱっと目についたのは実は3番目の「まちなかアート事業」で、これならすぐできそうだなと。まあこれに近いことはやってきましたが。

大澤委員

これもやりましたよね。石原都知事にかわったときに、小金井公園でもヘブン・アーティストがやったんですけど、あれはちょっと中途半端ですよ。

久保副委員長

それでは、8時まで休憩といたします。

事務局（小林）

事業の話は本当にこれで最後になってしまいますので、いろいろと思いがあられるかもしれませんが、言い足りないことは何か残しておいていただきたいなと思います。

（休憩）

久保副委員長

ではこれより、前半でお話した事業をどのように推進していくかについて、推進体制案を説明していきたいと思います。

事務局（中村）

では説明させていただきます。先程から担い手の話についていろいろ出ていますように、私たちの方では、これまで皆さんにお話いただいた議論をあらためて考え直した結果として、小金井の芸術文化振興を進めていく担い手といったときに、基本は普通の、一般の市民の方の参加が主体にあるべきではないかと、そういうかたちが小金井ではふさわしいのではないかとすることを提案させていただきます。ただ、そうは言っても、いきなり今度の4月からというのはかなり無理だと思うので、一応第1期として最初の3年間をかけて準備した上で、行政からゆるやかに市民主体によって小金井の芸術文化振興が移行していく形がいいのではないかと考えているということです。詳しい説明の方は資料3をご覧くださいいただければと思います。

これまでの話は何をやるかという話でしたが、ではそれをどうやるのがいいかという話になったときに、市民参加というのは行政が責任を放棄するのではないということをまず確認させて下さい。ただ行政の施策としてやる以上、行政が責任をちゃんと取らなくちゃいけないというのはその通りなんです、その範囲はあくまでコーディネート的な部分になるのではないかと、基本はやはり市民の力を活用していった方が小金井ではいいのではないかと、と私たちは考えました。

考えた背景には、これまで委員会で皆さんのお話聞いていてもそうですし、講座でいろいろな小金井の市民の方とお会いして、すごく元気な、エネルギッシュな、いろんな活動している方が多いと思ったことがあります。それから、せっかくやるなら、そういう人たちがうまくつながってほしい、つながるだけでもできることがたくさんあるのではないかと考えたということもあります。そして、これは増田さんが施設の運営計画の委員会での話をして下さったときにすごく印象的だったんですが、その時に市民で頑張って充実したものを作った、実際拝見させていただいたんですけど、すごい中身だったと思うんです。それなのに、作ったあとでやっぱり指定管理者にするかも、という話が出てきて、ハコができていないこともあって、ちょっと曖昧な状態になってしまっている。そのときに私たちが考えたのは、逆に指定管理者になったとしても、直営とか財団とかではなくな

ったとしても、全然知らない会社に持っていかれるよりは、むしろ市民で NPO なりあるいは何らかの他の形で法人化して、指定管理者を取りにいかうじゃないかって思えるぐらいの体勢を、市民で作ることが小金井ではできるのではないかと、そう思ったということなんです。

ただ、実施主体のところにも書きましたが、いきなりは無理があるので、第 1 期 3 年ぐらいいを移行期間としてとらえて、その移行期間の間、ここに書いた体制、市民が育っていくということもそうですし、拠点を用意していくとか、メディアを作っていくとか、そういったことも含めて準備していく期間に、コ・ラボ事業という事業を進めながら周りの環境も整っていくという準備の仕方が、実践的ではないかと考えています。事業を進めながら、というのは、事業で使えないものを用意してもしようがないと思ったということもあります。そういうふうにはやっていくなかで、これは私たちが信じていることなんです、小金井で自分たちでやるよっていう人が出てくるのではないかと考えているんです。そういう人たちが出てきて、だんだん第 2 期・第 3 期とうまく移行していくことができればいいのではないかと。それまでは一応、講座中心に行う第 1 期の間は行政主体ということになります。あと皆さんのご承認がいただけるなら、私たち東大の方でも 3 年間は引継ぎという形で、責任を持ってサポートしていきたいと考えています。

では主体は市民といったときに、行政はどのように関わってきちんとコーディネートしていくのか。そのために 2 つ仕組みを用意しました。推進委員会と評価委員会です。

推進委員会は、この委員会みたいなものを年 2 回ぐらいうるイメージです。メンバーとしては鈴木さんのような市の文化課の職員の方と、公募の市民の方と、あと各実施主体、市民団体も複数できるかもしれないと思ったので、そういうところに関わる人の代表の人が集まる。あとそれだけだと議論に収集がつかなくなるかもしれないので、外部から専門家の方を入れる。この専門家というのは、決して芸術の専門家という意味ではありません。ましてやここでは毎年報告して評価してというのも、芸術の中身を評価するという意味ではなく一それは行政がやるべきことではないと私たちは考えているので一ただいろいろなことを知っていて全体に目配りできる人、芸術のことももちろん知ってないとまずいですが、芸術だけではなくまちづくりのこと、芸術文化にまちぐるみで取り組むということの可能性を、多角的にいろいろな視点から考えられる人、という意味での専門家の方に外部から入ってもらおう。それによって、議論が内輪で固まることなく新しいことを取り入れていながらできる仕組みになるのではないかと思います。先程田中先生がおっしゃっていた、プロデューサーとかコーディネーターとかの役割の方も、入れるとしたらここに入れるのがいいのではないかと思います。推進委員会の場で、毎年どういった事業をやるか、各実施主体が報告して、それに対して承認というか確認をして、それぞれの実施主体が 1 年間頑張った結果どうだったか、つまり計画の趣旨と実現にどれだけ貢献したかということを確認する。そういった、いわば NPO とその理事会みたいなイメージですが、そういった確認の機会があり、一方でそれが小金井の芸術振興に関わる人たちの情報交換の場、報告・連

絡・相談の場にもなります。そのような場として、推進委員会を年 2 回、年度頭と年度末かと思いますが、というような形で開くという仕組みが、まず一つ目です。

そして、それだけでは 10 年の間にルーティーン化・マンネリ化してしまう可能性があるため、3 年に 1 回外部の方を評価委員会として入れる仕組みを考えました。そのメンバーとしては、市の文化課以外の方、市の全体の政策に目配りしている方という意味で、企画政策課と財政課の方がいいのかな、と現時点では考えてみましたが、それは後に調整させてください。それとさっき言った意味での、いろいろなことに目配りができるという意味での専門家の方。そうした場で、本当に外の視点から小金井を見たときに、何ができていて何ができていないのか、よく私たち学生が就職活動をするときに、自己評価と他者評価と両方必要だと言われますが、その他者評価の部分を 3 年に 1 回やっていく仕組みが評価委員会です。

スケジュールについては、最初の 3 年間は移行期間で、行政主体から市民主体に移行する。そのあと 3 年間は市民主体でどれだけできるか頑張ってみる。そこで 1 回外部評価が入った後、引き続き自治体文化振興を推進しつつ、この計画のそのさらに次の 10 年のことをそろそろ考え始める時期が、この計画の第 3 期です。そういうイメージになります。

条例の第 9 条で推進機関というものを定めなければいけない、そこで調査研究による提言とか、基本計画の評価とか見直しを行うとされています。一つの機関で評価・見直し・調査研究などを全部一緒にやるのはちょっと大変だということもあり、推進委員会の組織の図では、三権分立というわけではありませんが、推進委員会と実施主体と芸術文化振興の評価委員会という 3 つの仕組みを考えました。先程から述べておりますように、推進委員会はこの委員会のような会議の場で、小金井の芸術文化振興に関して意思決定を行う、必要に応じては提言も出す機関です。具体的には実施主体が毎年出してくる計画を承認して、その総括・まとめ・確認を 1 年ごとに行う。同時に、市内の芸術文化関連のいろいろな主体がありますが、そうした人たちの代表者会議として、報告・連絡・相談の場としても機能する場でもあります。だから参加者は市の文化課の職員や公募の市民、各実施主体の代表者も含む。実施主体は、本当に実際手を動かす人たちで、形としては NPO だったり市民の任意団体だったり、いろいろあっていいと思いますが、そういう人たちの活動です。拠点の運営やメディア作りはお金もかかる事業ですので、場合によっては行政の業務委託という形にもなるかと思いますが。その場合には、毎年こういうことをやりますという年次計画を策定して、推進委員会の承認を得て、実践してまたそれに対して評価を得る、そういった形で実際に計画の内容を進めることになります。

また、3 年の間にはさすがに市民交流センターができると思いますので、できた暁には、そしてそれが指定管理に出されるのであれば、積極的に市民主体で NPO 法人をつくって、「他の業者に取られるぐらいなら自分たちで取りにいく」というのがいいのではないかと思います。

1 年毎の基本サイクルに加えて、3 年毎に評価委員会でも評価をしてもらおう。評価委員会

の方は3年に1回だけ設けられる委員会と思ってもらっていいですが、推進委員会の依頼を受けて、計画の進捗状況の評価を外部の視点から行う。参加者としては文化課以外の職員として、財政課の方ですとか企画政策課の方とか、あと市の方だけだとまずいような気がするので、専門家の方に入ってください。この時の評価の指標としては、利用者数とかそういう分かりやすい数の指標だけではなくて、満足度とか質の部分も入れていく。そしてこの計画をつくるに当たって実施したアンケートの調査項目の一部は、評価項目としても使えるのではないかと私たちは考えているので、小金井市の芸術文化にどれくらい満足していますとか、小金井のどこが好きですかといった項目をそのまま使い、評価の指標につなげていけるのではないかと思います。また、評価委員会を設けたもう一つの理由は、やってみただけでちょっとうまくいかなかったよね、という事業についてはやめるための仕組みも用意しておかないと、いつまで経ってもずるずる続けることにならないかという危険もあります。それはちょっともったいない話です。評価委員会が外から見て、「頑張っているのは分かるけどこれはやめた方がいいよね」という事業については、やめられる仕組みを残しておきたいと考えました。もちろんその評価の結果は全面公開する方向で進めたいと思います。そうした外部評価をふまえて、また見直しして計画に取り組む。そのプロセスを通して、計画を10年間かけて実現させていくという推進体制がいいのではないかと私たちは考えています。

最後にもう1点、財源についてです。先程も述べましたように、緩やかに行政主体から市民へ移行していくという形が小金井ではいいのではないかと考えたので、すぐにはこういった財政の形というのは決められないというのが正直なところです。例えば、財団になったらその財団のお金として出資することになりますが、それが市民のNPOになってくると、また出し方が違ってくると思います。ただ、何らかの形で固定した基金・積立金、芸術文化のための財源の確保は必要ですし、あと最近ではふるさと納税ですとか、寄付金をうまく使っていくという方式も出てきましたので、行政主体から市民へ移行する3年間の間に、行政の方でも財源を市民主体の形に合わせて確保する、そういった方法を3年間で考えるように、計画で行政に義務付ける。行政の方からも推進委員会で毎年報告を出して確認して…そう仕込んでおきたいと考えています。

長くなりましたが以上が、これまで私たちが2年間委員の皆さんと、あと講座を通して、小金井の方とおつきあいさせていただいて、小金井ではこういうやり方がいいのではないかと、これならできるのではないかと、提案させていただく進め方です。

久保副委員長

今の説明に関して質問は。

田中委員長

この絵を示していただいたので、非常にわかりやすいですね。下にあるこの、第9条はこ

の芸術文化振興条例？

事務局（中村）

条例第9条です。

田中委員長

この中では、条例では、芸術文化振興推進機関とここに書いてあるんですが、それを具体的にしたもののが、下にある小金井市芸術文化推進委員会という考え方でいいですか？

事務局（中村）

委員会と、その周りの実施主体と、評価委員会。狭い意味では、推進委員会と考えていただいていいですが、推進委員会だけだとちょっとできない部分、評価とかの部分は評価委員会もあった方がいいかなと。

田中委員長

評価は、それはまた別な質問なんですけど、それはその推進委員会の下ですよ、実施主体っていうのがありますが、これはそうすると表現が悪いけど、NPO 法人が推進委員会の下請けをする、そういうイメージなの？しかも業務委託って言葉が入っているから、推進委員会の運営には市も入ってきますので、まあ行政主体かどうか…、推進委員会があって、そこと NPO 法人が契約、業務委託をするでしょ。委託してやるわけですから、言ってみれば NPO 法人が実働部隊。

事務局（中村）

そうですね。

田中委員長

下請けとして、実働部隊として活動するというイメージ。

事務局（中村）

下請けという言葉が悪いですが、NPO がそれだけ公共性の高いことをやるなら、それに対してちゃんとした業務委託という形で行政のほうでも出すものを出す仕組みにしとかないとおかしいと思ったというのがあります。

田中委員長

ええと、ですからそれは話の前提として、推進委員会はすぐ作れると思うんですよ。けれども、NPO 法人は今あるかどうか分からないし、これから作るかどうか分からない。実際の

活動は NPO 法人がやるわけだからね、そっちのほうをいかに作るかっていうことを、たぶんこれから議論しないと、この絵はうまく動かないと。上の推進委員会はすぐできるので。

事務局（中村）

最終的に、この絵の通りに動くとしても、3年くらいはかかるだろう、というところですよ。

田中委員長

そうすると上の第一番の移行期間っていうより、むしろその、なんていうのかね、ヒナをかえすみたいなイメージの、準備期間とか、そういうふうには言っちゃって、たぶん、そういうふうには、言葉はいろいろあるけど、たぶんこの最後の6年後10年後に行くのはこの準備期間、準備期間にすべてがかかっているっていう、（笑い）今思ったんですよ。まあたぶんそういうことは考えていらっしゃるだろうと思いますけれども。

池口委員

そうですね、その NPO の実施主体づくりというところが、すごく大きくなっていくということですよ。それをじゃあ作る手法、きっかけづくりとしては、要するにこの事業の…実施という、のがポイントですね。

事務局（中村）

はい、やりながら、人を見つけて、そういった人たちをつないで、うまくやっていこうというのが狙いです。

増田委員

講座やりながら。（笑い）

田中委員長

ええ、市民講座を。

池口委員

講座ね。なるほど。私その市民の講座にほとんど、全然出られなかったんで、積極的な市民の人たちのエネルギーを実質的にはちょっと分からないでいるんですけども、可能性としては十分感じられる、た、わけですね。

事務局（小林）

感じられます。

事務局（中村）

講座をやるときに、こちらとしても中で段階的に仕組みとして作った部分がありました。特に今年の講座はかなり課題をたくさん出していますが、その課題にすごく積極的に取り組んでいる人たちもいます。今回の講座は特に発信がテーマでしたが、自分も何かを発信していこうと、講座をきっかけにして関心を持ち始め、いろいろやりたいと言ってきてくれた人はいるんです。そういった人たちが、1年ではなかなか政策の実施主体とまではいえなくてもいいかもしれませんが、3年かけたらもっといろいろなことができる人が、いろいろなかたちで小金井で何かやりたい人が、たくさん出てくるのではないかと思った、その手ごたえはあります。

事務局（小林）

あります。

例えば芸術文化を書くことの講座を立ち上げたときもそうですけれども、よくぞこういう講座を立ち上げてくれた、という反応もありました。今までにない講座で、自分たちの関わり方の在り方を発見できて、積極的にそれを見せてくれる人たちがでてきているという実感があります。、何とかこの人たちともっとつながっていきたい、今までの人たちも含めてですね、つながっていくと可能性が開けるっていう実感は持っています。

事務局（中村）

本当に、今回講座をやってみて、「いろんなことができる人がたくさんいたじゃないか」と思ったというのが正直なところなんです。で、いるなら活躍してもらったほうがいいですよ、ということです。

増田委員

表に出てきてもらいたいですね。

事務局（小林）

現在までに講座通信というものを、3号を出しています。それで最初の課題はルポルタージュをしてもらおうっていう形で、小金井の、まあ芸術文化ってそんなに特化したわけではないのですが、探し出してきて、ルポしてくださいっていうかたちで課題を出しました。素晴らしい作品がでてきています。いまブログのほうにも出てます。こういうものを使って、小金井のさまざまな芸術文化をやっている人たちを紹介していくことができないかと私たちは考えています。

事務局（中村）

講座通信のデザインも。

事務局（小林）

デザインも実は受講生がやってくさっています。写真もそうですよね。

事務局（佐藤）

写真もです。

田中委員長

ええとこういうふうなイメージ、いろいろわかりやすく、中身いろいろ議論しなくちゃならないんですが、こういう形で今やっているような、市とか例ってありますか。何か動きそうな話とかなにか。

事務局（小林）

あまり見あたりません。調べていると、なにか面白い事業をやっているっていうところがあります。市民参加型でやっているといえば、取手のアートプロジェクトのようなものなど、市民と大学と芸術家と一緒にアートでまちづくりとをしています。

田中委員長

とそこの推進委員会と下の実施主体というこういうのも、関係も初めてということでしょうかね。

事務局（小林）

たとえば、いま事務局（鈴木）さんが担当でいらっやって、たとえばこのコ・ラボ事業やることになったときに、事務局（鈴木）さんが一人でこれ全部やるということは考えられません。現実には多くの人にかかわってもらわないと動いてこないわけです。田中先生はいま下請けと、おっしゃいましたけれども、下請けではなくてやはり協力者です。本当に一緒になってやらないとできない。業務委託という言い方が適切ではないのですが、お金の流れに注目した場合に、業務委託という言葉しかないかということでここに出しています。

田中委員長

それだったら業務委託で書くのはしょうがないことで、たとえば協力とかなんとかもっと表に出したほうが。今 NPO 法人の現場ではそこが非常に今。

事務局（小林）

そうですね。実際には、下請け状態になっていますね。

田中委員長

苦情も来てるし、本人たちも困ってるし、そこに…もさられていると思います。

事務局（鈴木）

ひとつだけ実例を。横浜市の金沢区でこういう講座をやりながら 3 年かけて実施の主体である「よこはまメセナ研究会」（後に「よこはま市民メセナ協会」と改称。）を設立しています。それが推進体制とどう繋がっているかというところまではわかりませんが、講座をやって、それでその協会というものができて、実行委員会形式かなーと思うんですが、事業を展開し始めていますね。もうそれはかなり前、10 年くらい前からそういうことが行われているんだと思います。

事務局（中村）

講座っていう形を使ったらどうかっていうのはそうならないんですが、市民参加で施設の運営をするっていう意味では全国的なんですけども、ただ小金井の場合まだ施設ができていないっていうのと、別に施設だけにとどめる必要もないよねっていう意味も含めて、それをものすごく広く可能性として考えているっていう、その広さっていう意味ではもしかしたら小金井が初めてかもしれないですね。

池口委員

一つの小さな事業のそういう活動っていうのは当然あるでしょうけれど、これはほんとにまちづくり、まちを全体を見た芸術活動の、ほんとに主体となるグループとなるわけですよ、ここがね。

事務局（中村）

どこでもできるかといわれると、どこでもできることではないと思います。でも、小金井では、できるのではないかと思います。

池口委員

ふうん。まあだから推進委員会というこの連携ね、そこが非常に重要な。…だからこの活動拠点としてはこの市民交流センターというところがやっぱりベストであろうというご提案なわけですよ。そのとおりですね。そこしかないですもんね。（笑い）

田中委員長？

だから 3 年後でできるっていう。文化交流センター使ったりしてこう、ね。

田中委員長

できたときに、市民交流センターができたときにはもう、この NPO 法人もできていて、もうすぐに行って、それが文化…

池口委員

そうですね。

増田委員

それでもまあね、3年で作ると結構きついよね。

池口委員

そうですね、いろいろ戦術的に人を作っていく。

増田委員

これは、交流センターはできるんですよ。それは、管理運営のことで、当初は3年くらい行政、職員でやってもらって、それ以降市民に落としてくってという、その後指定管理者制度っていう法律が上がってきちゃったもんだから、そこでまた変わってきちゃったんですよ。我々の委員会の中には、指定管理者制度はなかった。だからここで書いてたのが主体のイメージですよ。こういうイメージでやろうかと。市のほうじゃどっちかという指定管理者にだいぶ傾いちゃってるから。(笑い) という感じでは聞いてますけれども。それと、この予算、財源ですよ。これ作るまでの事務局だとかいろんな方がかかわってこない、その前の段階で、準備これ結構大変だと思いますよ。講座開く前の準備とか、講座始めちゃえばいいと思いますけれど、その前の段階みたいなものから含めて、この3年というのはあっという間に経っちゃいますから、こう、もうちょっと具体的に作っていかないと、…ここでいろいろね、市民交流センターのオープニングの話も当初したんですけども、少なくとも3年前からここに…か。そのぐらいから考えていかないといけないかなって、じゃないと出演してもらおうとしたって、交渉…はじまっていますから、立ち上げからオープニングの公演まで3年くらいかかるかなってというのは委員会の中で話し合ってきました。それよりも非常に壮大なものですから、これはね、ですから、(笑い) 交流センターはその一部ですから、ですから大変なことだなあと。まあイメージ的にはよくわかるんですけど。具体化していくのが大変だなと。それに今度は予算を付けてかなきゃいかんから。役所の予算っていうのは形がこういうふうにとんくらいかかりますよと積み上げていかないと、予算ってのはくれないんですよ。ね。

事務局（鈴木）

はい。

増田委員

だから、…

事務局（小林）

それはね、事前に積み上げてみました。

増田委員

はい。（笑い）お金結構かかるでしょ。

池口委員

事業的にはこの3つのご提案の、これでご提案のここの部分を、10年かけてやっていこうってことですよね。となるとたとえば、今すでにある地域の様々な活動を有効にこの施策を利用して、こう結集させて、連携をしながらという仕組みを作っていくって、という感じなわけよね。

増田委員

具体例てのはありますよ。たとえば、この手のは私も、例えば公民館、分館は館ごとに運営主体を作って、それをイベントやったりね、講座を含めてやってる。これがなかなか一緒にならないね。

中野委員

場所がないんですよ。

増田委員

（笑い）…場所もそうですよ。そういう、個々にはある、ばらばらの場所は。

事務局（小林）

それは私たちも調査しててわかっています。

増田委員

そのほかにあったり。

事務局（小林）

そうなのです。もう少し連携させたいという思いがあります。ばらばらにやってるのはもったいないというのがあります。ですから、今までやってきたものを壊してしまうのではなく、これまでのものをつなげていくたというイメージです。

増田委員

エネルギーになるんですよ。非常に小金井の人は優秀なんだけど、誇りを持っていて、ある種わがままで協調性がない、(笑い) それは私もいやってほど今までね。

事務局 (小林)

芸術文化活動やっているって方はたいていそうです。

増田委員

その中でもある程度ね、頭が柔らかくて全体を見通せる人がいないと。

事務局 (小林)

増田さんのようにですね。

増田委員

そうそう。(笑い) 中身が何もないからって、よそからなんか持ってきてくっつけちゃおうとか、…少し大胆な発想がないと、なかなか。とてもいいことが書いてありますよね。当面できるのはね、さっき言ったように今あるものをどうやってこうね、つなげて出会うことができるか。

中野委員

ほんと個々にはいいものをもってますよねみなさんのね。活動場は。

増田委員

非常にね、また大学も多いわけだし。今あるものだけでもうまくリンクしてけばかなりの。で芸術家の方もかなりいますよね。アニメなんかも。今あるものだけでもうまくやっていけばできると思うんですけども。そういう意味ではこのなんとかフェスティバル、アートウィークス。こういう、やっぱりね、実際に参加しながら作っていくっていうふうにはいかないと、会議だけやってもなかなかこれはね、できないですよ。でやっぱりそこでお互いの人間、信頼関係がある程度出てこない、問題の出現で…(笑い) そういう、ある程度想定しておくことも、やっぱり生の関係が非常に大事で、そこから非常に広がっていくんですね。その人の持つ、人のつながりをそこへ寄せていくというようなね。そこをうまくやれば、相当な広がりをもてるんですよ。それだけの人はいると思いますよ。

池口委員

だからそのネットワーク化をするというところが、と、そのネットワーク化をさせるため

の主体者づくりというところの、主体者を作るのが3年後を目標に動こうとしているとき、こっちを、今のこのネットワーク化をね、だれがどう3年後に向けて、3年後その人たちがスタートできるようなスケジュールをどう具体化していくかっていうのが、すごく、3年で、なんか、ぜんぜん私はイメージできないんですけど。イメージっていうか。これ行政マンの頭が変わればね、すぐ回っちゃうことなんだろうけど、ようするに（・・・）ですからね、そのそこはね、だれがいるんだろうって。ちょっとわかんないですね。

増田委員

それとね、役所のね、文化化って前もよく言われましたよね。

事務局（鈴木）

はい。

増田委員

（笑い）…っていう話があると思うんですけども、まあ事務局（鈴木）さんとか今の文化課の方は比較的。感心。（笑い）かなりですよ。（笑い）文化おたく的などころがあるんですけど、こういう人珍しいんで、一般的にはなかなかこの、ねえ、むずかしい。市民祭りでもそう。たとえば事務局がいま…やってますけど、その時の担当しだいでもう本当にこちらと一緒に楽しくできるかはすごく。文化にもっと関心がある職員の育成。こっちの間ではできませんけれども、やっぱり職員の育成みたいな。これはやっぱり、どうしても欠かすことができない話なんですよ。で、お金も相当かかるし、交流センター出来ただけじゃなくてなお…わけですし。だからそういう意味では、関心のある職員を育ててほしい。という希望もあります。

事務局（小林）

ちなみにですが、今の芸術文化を書くこと講座にも職員の方が出てくださってるんです。

増田委員

今後出てくるかもしれない。

事務局（小林）

そうですね。

増田委員

今まで職員に呼びかけてなかったでしょ。どっちかという公民館なんかは、委員会や職員がいて、そっちで決めたものに来なさいよ、ていうイメージだったんですよ。だから、

この事業主体のほうが、やることでまあ違ってくるかもしれないですよ。

久保副委員長

推進体制について、まだ発言してない方。みなさん一言ずつ今。

田川委員

私は今、公民館の実行委員、企画実行委員やってるんですけども、あれはいろんな人がいろんなことをやっている分野で活躍してたり、遊んだりとかしてますけど、私たちがそれを一年間企画するんですよ。でもだいたい今は前年に応じてで、あとピックアップしたものは、その世の中の、団塊世代なら団塊世代を対象に、じゃあどういいう講座を組もうかっていうことを、われわれが討論して、そしてじゃあこれとこれって決めてやるんですけれども、ここで今評価、外部評価っていうのがしっかりと組織ができた場合に、人数、参加者人数とか、それによって評価されたくない面があるんですよ。本当にこれは世の中のためというか、人を育てたり、あるいは発信するという役をやってても、利用者が少ないから廃止になるっていう講座がありますのでね、で世代間交流や何かでも、続けてきたものが今子どもの数が少ないから、ということとあと団塊のほうに重きを置いて、今子ども世代間交流の講座は廃止になったんですけども、だからその評価が大変難しいなあと思って、私も高齢者のほうで高齢者学級っていうのをだいたい私がほとんど講師として組んでるんですけども、それはコンセプトとしては健康、これからの老人社会の健康、長寿社会に対するいろんな運動から知識から、トータル的に3ヶ月のスパンで組むんですけども、それがいいと思ってもそれは人数が少なければそれは評価が得られないんですよ。だからそこは難しいなあと思って。うん。

池口委員

質問ですけど、要するに評価委員会というのはそういう個々のね、市民活動にまで、市民活動とか、という部類の部分までは、とんでもない話ですよ。そうじゃなくて、こういう大きな、なんのために、目的があって、(増田委員の発言) そうそうそう、この推進計画の目標のために、目的のために実行する大きな、こういうことに対する評価委員ですよ。

事務局 (中村)

はい。

池口委員

すいませんありがとうございました。それであればあんまり危惧する…(笑い) だからそういうことをきちんと書いておけばね、いいの…とんでもないことになっちゃいますよね。

増田委員

そうそう。…

池口委員

とんでもない。

田中委員長

今の評価の話ですけど、この絵で行くと外部評価ですけど、これやっぱり外部評価って言葉を使うんですか。だって小金井市の人々でしょこれきっと。確かに推進委員会と実施主体の外には出てますけど、この評価委員会では…上の市企画課財政課、って書いてあるから、市の企画みたいなことだと、これだとねえ、…外部評価ってこういう言葉の使い方するの。

事務局（佐藤）

推進機関と実施機関とは関係のない、その外の機関という意味で外部評価といってるんですけれども、

増田委員

…

事務局（佐藤）

市内外というよりは。

増田委員

お金の使い方とか、そういうの見ちゃう。ねえ。てことは、そういう評価。対費用かけても効果があまり出ないとか。

事務局（小林）

ただ、もちろんその具体的な事業の中身は別としても、まったく無視はできません。やはり税金を使いますから。ただこの計画の中を見ていただくと、多様性を保障する基盤整備ということも書いているわけです。だから、たとえ人が入らなくても、これは非常に重要な講座であるのだとしたら、多様性を保障するという視点から重要だと評価してもらわなければ困るわけです。ですから評価ということも、評価の内容と基準ということ調べてこれからさらに考えていかななくてはならないと思っています。

増田委員

この9つ。

事務局（小林）

ええ。

増田委員

これならわかりやすい。こっちだけ読んでいてもだんだん頭が。（笑い）

事務局（中村）

この紙にしたほうがよかった、（笑い）

増田委員

こういうことをね。

事務局（小林）

私たちこれから次回までに文章化をするわけです。でそれは庁内にかけて議会にかけていくわけです。それと、市民向けになるべくみなさんに分かってもらうように表現することは別ものになる可能性もあります。まずは、庁内と議会を通さなければならないので、そこはどうしても分かりにくい感じになってしまうかもしれません。

増田委員

ええ、選挙前はそうですよ。

事務局（小林）

（笑い）

池口委員

しかし市民に分からなきゃいけない。

事務局（小林）

その通りです。

池口委員

市民…議会も役所も一緒に、市民感覚になってなきゃいけないので、同じでもいいような気がしますが。あと質問いいですか、この評価委員会に市民という参加枠というものは必要ないものなんでしょうか。その上部に、この目的の9つの願望、ここの部分を十分に書

き込んで、それを認知した、分かった評価委員であれば、いいということなんですか。でも果たしてそれが企画財政課さん等々が、そういう視点をもって、これは何年かに一度はお替わりになる役所マンですよ。だから専門家の位置づけがここではとても、こういうときには大事なポイントになると思うんですが。もちろんそういう専門家をね、ここに配置できることはあるでしょうけど、その専門家をフォローするって言ったら大変失礼ですけれども、その、ともに、この視点に立ち返ろうよっていうことを言えるような、なんていいますか、そういう視点の市民っていうのは必要ないんですか。

事務局（小林）

入れたらどうですかというふうに言ってくたさると、入れましょうということになります（笑）。

池口委員

あ、だから入れなかった理由というのはあるんでしょうかというのがお聞きしたかったんです。私は入れたほうが。

増田委員

入れたほうがいい。

池口委員

私は何でも入れたほうがいような素人考えなんです。うん。どうなんですかね。

事務局（中村）

ちょっと迷ったのは、実際には違う方とはいえ、推進委員会にも評価委員にも公募市民という書き方は、重複になってしまうかなというのがあります。

どちらに入るべきかといえば、やっぱり推進委員会だと思いました。評価は、外部評価として、外の視点をもう大事にしたかったので、公募市民を外してみたわけです。ただ入れたほうがいいというご判断でしたら、それは検討させていただきます。あともしほかに、こういう人に入ってもらったらいという提案はありますか。評価に限らず、推進委員会にしても実施主体にしても。

久保副委員長

大澤委員何かありますか。

大澤委員

…（笑い）この、NPO 法人が実施主体のイメージで、実動部隊にしたわけですよ、これは

先ほど、いろんな方に、いろんな団体に顔が利くような人というわけなんですか、あの、全体をまとめるというのか。

事務局（中村）

もちろんそういう人にも入ってきていただきたいです。ただ、一つの NPO で絶対全部やらなくてはいけないというものでないかと思い、ちょっとぼかした書き方にしています。実際には、いろんな活動に目配りができて、いろいろなところに顔が利くような人が入ってきていただかないと回らないと思うんですが。

大澤委員

それはどういうふうにするんですか、まあ具体的につつちゃあれなんですけど、どういうふうなかたちでそういう人が。今から探すという、そういう。

事務局（中村）

今、それこそ講座を通して、この人とこの人がこんなところで知り合いだったという発見や、こういったネットワーク、こういう活動があるという発見が、特に環境系の NPO で、実際講座に出てきてくださる中でたくさんあるんです。おそらくそれ以外にもたくさんいらっしゃるでしょう。今の時点だとまだ、私たちはその一部を感じ取っているだけですけれど、3年かければ、もっとたくさん見つかるのではないかと思います。

大澤委員

それはあの、別の話で、講座開いたときに、こうやって講座開いたときに、こういう人がいたんだって、先ほどいたんじゃないかっていう話をされたじゃないですか。そういう人たちっていうのはすぐにそのまた集まれるというか、集められるということが…

事務局（中村）

そういうふうに、講座としては仕掛けていこうと思っています。今回、講座受講生どうしの交流の機会を、懇親会を設けたりとか、インターネット活用したり、紙上でも講座通信を出したり、かなりこまめに設けました。今後は、講座を通して交流の機会を作ることに加えて、講座自体も3年継続させていく中で、修了生のネットワークをうまく活用したいです。お互いに連絡とれるようにしたりですとかね。

事務局（小林）

私も、最初に条例で関わってきてから計画で3年関わってきました。条例と計画に関わってみて、私は武蔵野に住んでいて近いからというのもあり、なおさらなのですが、もう少しやってみようという思いが出てきました。講座で知り合った方たち、それから増田さん

とか大澤さんとかもそうです、ここでお集まりいただいている方たちとか、それをつないでいくような活動を、もう少しやってみたいということです。ここにいる学生も含めて、3年くらいは自分が就職するまではやってもいいよっていう確約も取ってます（笑）。

増田委員

ありがたいな。（笑い）

事務局（小林）

どこまでできるか分かりません。さきほど、みなさんすごく深刻な顔をして考えてくださって嬉しいのですが、実施主体を3年くらいを目処に作りたいというところですが、自立して独立したものを作っていきたいと思っても、目標は目標です。うまくいかなければ、5年に延ばしたっていいではないですか。

田中委員長

この、ええと文化推進委員会の下の実施主体イメージね、NPO法人、何かその包括的な、あるいは包括的な組織が仮にできなくても、あるいはできるのが遅くなっても、小金井市には個別の協会団体たくさんありますから、推進委員会がリーダーシップをとっていけば、十分可能なんですよ。それも気楽に考えるとずいぶんやりやすくなると思います。

大澤委員

…なのはですね、結びつけてるんですよ、自分で今までのことと、これからどうなるのかということ、今いちばん苦勞している弱いところをいちばん強い発言で、っていうと、やっぱりそうでしょっていうふうになってしまっているところがあって、まあ現実的にちょっと、あの、言葉はあれなんですけれども…

事務局（小林）

大学の研究者なんて、机上の空論みたいなことを考えているだけではないかと思われるかもしれないのですが、例えばですが、増田さんとか、大澤さんがこの間ずっとおっしゃってきた悩みとかっていうのは、大澤さんとか増田さんだけの悩みではなくて、実は日本全国共通の悩みなのです。そういう人たちが、陥っている隘路みたいなものも、私たちは机の上だけのことかもしれないけれど、結構知っています。そういうことを、なんとか解決しようといういろんな活動があちらこちらの地域で起きてきているわけです。例えば学校連携の話もそうですが、学校の先生たちを変えようと思ったら、学校の先生たちのワークショップをまずやらなくてはならないわけです。実際、そういう活動をしているところももうあるわけです。それででは、市民交流センターができれば、その暁には、学校で、みんな市民交流センターに行って、大澤さんの公演を見てくださいということにしても、これ

は実現には難しい問題があります。そうだとすると、学校に活動を出前するような、アウトリーチ活動を専門にやっているような人たちも出てきてるわけです。私たちの仕事は、いろんな情報とか知識とか研究など、そういうのを使うことが私たちの得意とする分野です。それでやってみようとおもうわけです。それでやってみてもうまくいかないのなら、また考えればいいというやり方でやってきました。私たちが関わったからすごく変わりますなんて、それは言えません。でも、新しくこういうこともやってみませんか、という提案をするということです（笑い）

大澤委員

まあその通りなんです。先ほど増田さんが言った、行政のほうですよ、事務局（鈴木）さん、なんですか、文化おたくですか、…（笑い）職員が変わらないと、だからほんとに、職員もこういう、失礼ですけど、事務局（鈴木）さんみたいな方が増えなければ、いくらこう話しても、私は先ほどから。

事務局（小林）

そうですね、それも実は全国の悩みなのです。

大澤委員

だから、先生のセミナーではないですけど、同じで、やっぱりそういうふうにやってくれないと。だから私が小学校にもやっているっていうのは、まあ自分たちの、小金井中の小学校の生徒が、こういうことをやってるんですよっていうことをまず先生を呼んでまあ見せるんですよ。それからこう広がってて。で。

事務局（小林）

可能性あるじゃないですか。（笑い）。

大澤委員

ただほら、あの、小金井全体で、何かをやるとかいう話になってしまうと、やっぱり先ほども言いましたけど芸術家っていうのは非常にまあ早い話へそ曲がりじゃないですけど、気難しいのが多いから、

事務局（小林）

多いですね。

大澤委員

なかなかそういうのを頭でイメージすると、この団体こうだな、とか、一回話して、けど

こうだな、とか、そういうこと頭にこう、ずーっと考えちゃうと、

事務局（小林）

私が少し思うのは、やはり外部の人がいいのだろうと思います。内部の人だとやっぱり利害関係がすごくあります。今回私たち実は5泊6日で合宿行きました。四国を回ってきたのですが、ネットワーキングしていくときのコアになる人物って、外部の人なのです。中でやろうとすると、あいつがまたなんか威張っているとか、あいつがいい思いをしてるとか、そういうことが起きるのです。外部から来た人が、地域の良さを発見したり、割とその人がつなぎ役になったりしています。外部だって、いきなり芸術家がたくさんいらっしゃるところに、著名な芸術家を上から落下傘のように持ってきたら反発を招くだけです。

大澤委員

でその人ですよ、その人がいちばん、ほんと難しい。

事務局（小林）

そうですね。こちらもいろいろと考えています。

大澤委員

誰もが、まあ言うこと聞くとかじゃなくて、ああ、この人の言うことだったら、っていう人じゃないと、やっぱり、また言いますけどへそ曲がりが多いんです。

事務局（小林）

それはわかります。

池口委員

そこはだから市民がね、市民ていうことがやっぱりキーワードになるんじゃないですか。

事務局（小林）

そうですね。

池口委員

やっぱりあの、プロでもない、ただの、ね、ただの市民。私やっぱり芸術が大事だと思うのよ、っていうその思いだけでいい、と思うんです。だからその、それができるのがやっぱりこの、実行部隊のね、NPO っていうところでは、これはいいなあと思いますよ。きっとそこは期待すべき人材をつくれればよろしいんじゃないでしょうか。（笑い）

中野委員

立派な人じゃなくていいですよ。

事務局（小林）

そう思います。

中野委員

ちょっと見えませんが、ここをいかに戦略的に。…じゃあ事務局（小林）先生にお任せするというので。

事務局（小林）

最後に言い残したことをお聞きできればと思います。

久保副委員長

何か言い残したことはある方は。

久保副委員長

これ文章化したのは、ここに書かれてることすべて文章化したのって、…この事業キーワードの、「音」「身体」「言葉」っていう3つにした理由って、ほかに何か…

増田委員？

若い人には…

事務局（佐藤）

ほかについて、理由ですか。これに、あの、この議論の中で、結構いろんなジャンルの話も出てきたと思うんですよ。あの、音楽とか美術とかでもやっぱそれは関係がないよね、っていうところはたぶんみなさんの意見の中であったと思うんです。そういうことを考えるときに、逆に切り口を音楽、美術とかにするんじゃなくて、その「音」と「身体」と「言葉」っていうことのキーワードで切ることによって、小金井の環境を見ていくっていう切り口も取れるし、ジャンルもいろんなものをすべて含んでいけるんじゃないのかっていう意味でも、その3つのキーワードにしたっていうところはあります。

増田委員

いいですか。ひとつ質問。来年度から予算は市で。

事務局（鈴木）

予算は、はい、要求、

増田委員

一年度から。

事務局（鈴木）

はい。予算要求していく方向で。

事務局（小林）

頑張ってください。

事務局（鈴木）

はい。(笑い)

増田委員

頑張ってください。

増田委員

だめだったときは署名運動でも何でもしますから。(笑い)

事務局（鈴木）

強い味方が。よろしくお願いします。

久保副委員長

何か言い残したことはないですか。

田中委員長

また言う機会はあるの。文章化する過程で。

事務局（小林）

まずはとにかく文章案をつくります。それを今度は次回の委員会の 2 週間くらい前をめどに、みなさんにお送りしたいと思います。でそれを見てきていただいて、またご意見をいただくのですが、10月29日はもう確定をしないとならないのです。庁内の中で調整をしていただいて、パブリック・コメントをいただくということになりますので、たぶんどご意見をいただくとすると10月29日より前をお願いしたいと思います。

事務局（小林）

今日ご欠席の齋藤さんと大久保さんと久保田さんたちには、今日のお話をさせていただいて、ご意見を伺っておきます。

久保副委員長

よろしいですかね。ではみなさん、活発な意見をありがとうございました。これで計画案に対する議論を終えます。

2. その他（事務連絡）

久保副委員長

では、今後のスケジュールを確認したいと思います。次回が10月29日、6時半からですね。次回の委員会は今お話があった文章化したものをみなさまのお手元に送らせていただきますので、それをチェックしていただいて、次回決定の運びになります。そのあと庁内での調整を経て、市民へ向けてのパブリック・コメントを行うことになります。最後にそのほか事務局からご連絡ありますか。

事務局（鈴木）

今、今後のことはお話していただきましたので、特にございません。今日言い足りなかったこと、最終いつまでだったら受け付けていただけますか。

事務局（小林）

9月いっぱいをお願いします。

事務局（鈴木）

じゃああれは言い忘れたってことがほんとにあったら、追加で、9月いっぱい、来週の火曜日までに私のほうにお寄せください。連絡をするようにします。今日は長い時間、ずいぶんオーバーしましたが、熱心に議論いただきましてありがとうございました。

久保副委員長

では、これで第10回小金井市芸術文化振興計画策定員会を終了いたします。ありがとうございました。